

free version

米国特許調査から 2010

門。

門伝也(もん でんや)著
発行:セルボニクス 出版部

まえがき

「科学技術立国日本」 そのコピーに危機感を持っている。

米国特許調査をネタに一年余りに渡ってブログを書き続けてきた。そこで、感じるのは、特許的に「非力な日本」だ。言語の壁も確かに存在する。英語民族に生まれなかった悲劇だろう。特許に対する価値観、評価が低いと思わざる負えない部分も多々ある。それらを差し引いて考えれば、心地よいが、それは余りにも自己満足的だ。

ところで、「パテントトロール」という言葉がある。定義は曖昧で誤解を招く点が多い。そのため筆者は極力その言葉を使わないようにしてきた。「パテントトロール」というレッテルを貼ることで、「悪」「忌み嫌うもの」にしてしまつて、逆に思考停止してしまっていないか？ それでは何も進化しない。現実を冷静に見つめるべきだ。

ブログでは、できるだけ自己満足にならず、冷静に状況を分析しようとした

つもりだ。本書では、それらを投稿の時系列ではなくトピックごとにまとめている。

「ハイブリッドカー」のエントリーでは、エンジニアS氏を発見した。彼は、執念の人だ。狂っているんじゃないかと思えるクレーム数。ひとつの特許を育てる気合。それに対して特許的サラリーマンな日本の大手企業のエンジニア達。否、違う。価値観の問題だ。車を作って売る。お客様に満足を提供する。販売開始日まで必死で頑張る。特許対策に十分な手が回らなくても許されるだろう。と、筆者の中の日本人が主張する。ものづくりの心と特許制度は矛盾するのかもしれない。ところが特許は現実だ。そこにある危機なのだ。事例は冷静に受け止めないといけない。

「無線LAN」のエントリーでは、海外からのライセンス料の直接獲得に励む国立の研究機関に出会った。その機関では、無線関係はむしろ傍流だ。そこからですら研究費を自前で確保しようという気合を感じる。果たして、日本の独立行政法人となった元国立研究所群はどうなんだろうか？ 学会、論文発表

のための形式的特許出願になっていないか？これが、「独立行政法人」シリーズを始めた動機だ。

りんごの行方では、ステイブジョブズに薫陶を受けた幸運なエンジニア達に出会った。うらやましい限りだ。そこでは、デザインという生命線の特許で守ろうとしているりんごの想いを感じることができた。

「米国特許調査から就職する業界を選ぼう」というエントリーでは、就職活動中の学生さんを念頭に、「特許って何？」というところから書き始めた。具体的調査の方法についても述べた。就職戦線を勝ち抜く小さな武器になってくれれば嬉しい。

「日経マイクロデバイス休刊」では、いささか個人的な感傷を述べさせていただいた。日経マイクロの心を継ぐジャーナリストになりたいと思う。

「特許明細書雑感」ではTips的なことを述べさせていただいた。実際に

明細書を書き、クレームという名の権利をものにしようというエンジニアの方のお役に立てれば喜びだ。

「CMOSイメージセンサー（CIS）」というエントリーもスタートした。CISは、今後、数十年に渡って撮像素子の主流をなすであろう期待の星だ。しかも、日本がよい位置につけてはいる。カメラ、ビデオのデバイスというだけではなく、将来的にはロボットの目玉となっていくことは疑えない。継続ウォッチ対象だ。

「大学特許」というエントリーもスタートしている。未来につながる技術が現れている。ただ、日本の大学の米国特許となるとお寒い限りだ。特にバイオ関係は桁違いの状況だ。その点は、もっと突っ込んで書きたいが、「予算がない」という反応が見え見えなので気が進まない。だが、2010年は心を鬼にして書き始める。そのほんのさわりだ。

その他、「スマートグリッド」「半導体X」「独立行政法人」というエントリーもスタートした。これらは数年に渡る息の長いテーマだと認識している。

ハシ休めのエントリーとしては、「特許探検隊より」というのを用意した。昔、メールマガジンに発信していた内容だ。筆者の原点とも言える部分だ。

最後に「オピニオン」のエントリーをまとめた。筆者のささやかな提案だ。

目次

まえがき

001

ハイブリッドカー

2009. 10. 10

ペイス社トヨタをITCに提訴

012

2009. 10. 23

S氏特許

020

新規書き下ろし

トヨタエンジニアとS氏の攻防

025

無線LAN：特許で揺らぐ

2009. 03. 17

C S I R O (サイロ)

029

2009. 03. 23

譲渡人と譲受人

037

りんごの行方

2 0 0 8. 1 2. 0 5	2 0 0 9. 0 6. 2 6	2 0 0 9. 0 6. 1 5	2 0 0 9. 0 5. 2 5	2 0 0 9. 0 4. 2 0	2 0 0 9. 0 4. 0 5	2 0 0 9. 0 3. 2 9
競争相手が知らない話	米国特許調査から就職する業界を選ぼう	ステイブジョブズ チルドレン特許群	謎の企業 特許を群れとして把握する。	虫の触覚と鳥の視線 579特許を見ていこう2	579特許を見ていこう1	米国特許 6879579
0 9 6	0 9 1	0 8 3	0 7 6	0 6 7	0 5 8	0 4 3

2008. 12. 13 米国特許調査をやってみよう！

2008. 12. 23 I S D 113

2009. 01. 10 特許の中身をみよう。

2009. 01. 19 U S P サーフイン 125

2009. 01. 28 英語がづらい 140

2009. 11. 30 日経マイクロボイス休刊

161

2009. 05. 06 特許明細書雑感

165

C M O S イメージセンサー

2009. 08. 11 キーワード

2009. 08. 24 裏面照射型

2010. 01. 25 C I S 応用

172

175

177

大学特許

2 0 0 9. 1 2. 1 1	2 0 0 9. 1 0. 0 6	2 0 0 9. 0 9. 1 4	概要 システム バイオ ス	1 8 7	1 8 5	1 8 2
--	--	--	------------------------	-------------	-------------	-------------

スマートグリッド

2010.01.18	スマートメーター	23世紀の未来では	2011
------------	----------	-----------	------

半導体X

独立行政法人

2009. 11. 02
新規書き下ろし

半導体化学デバイス
バイオ半導体

207
213

2009. 12. 13
新規書き下ろし

情報通信研究機構
情報通信研究機構の米国特許

217
226

特許探検隊より

2008. 12. 08
2008. 12. 07
2008. 12. 04
2008. 12. 04

MEMS
脳型コンピュータ
燃料電池今昔物語
「命を救う半導体」

230
246
241
251

オピニオン

2 2
0 0
0 0
8. 8.

1 1
1. 1.

1 1
6 7

注目ベンチャー紹介
特許大作戦

2 2
6 5
4 7

あとがき

2 2 2
0 0 0
0 0 8.
9. 9. 8.

0 0 1
1. 1. 2.

1 0 2
0 5 3

エンジニア派遣切りとTLO
未来につながる「公共事業」
退職団塊エンジニアを活用せよ。

2 2 2
7 7 6
8 3 8

2
8
2

ハイブリッドカー

2009. 10. 10 ペイス社トヨタをITCに提訴

「特許侵害…ITCがハイブリッド車めぐりトヨタの調査開始」（毎日新聞）

これはトヨタのハイブリッドにいずれ乗りたいたいと思っている筆者にとっては他人事ではないニュースだ。

「訴えているのはハイブリッド技術を扱うペイス社」（毎日新聞）とある。

ペイス社について調べてみたくなる。もちろん米国特許を通してだ。

とはいえ、スペルが分からないことにはスタートできない。ITCのホームページからスペルはP a i c eであることが判明した。

検索をかけると特許の件数は10件程度だ。

発明人口はわずかに2人。筆頭発明者にいたっては1人だ。

この筆頭発明者をS氏と呼ぶことにする。

筆頭米国分類を見ると、わずか3つに集約されている。

CCL / 180 / 65. 23、

CCL / 180 / 65. 27、

CCL / 180 / 65. 28

の3つだ。

トヨタのこの米国分類における特許件数はどうなっているのだろうか？
調べてみると、

米国分類 CCL / 180 / 65. 23

Patent 5件

TOYOTA 4件

米国分類 CCL / 180 / 65. 27

Patent 1件

TOYOTA 64件

米国分類 CCL/180/65. 28

Paice 4件

TOYOTA 67件

となっている。

CCL/180/65. 23はトヨタの弱点なのだろうか？

米国分類の定義をしてみる。

ちよつと長くなるが、米国特許庁にある定義を引用する。

65.23 Switching type (IPC) ..

This subclass is independent under sub
class 65.225. Subject matter where
in a series or parallel drive mode
can be either selected by a user o

r i s c h a n g e d a u t o m a t i c a l l y .

これは65・23が62・225の下位分類と言っている。

65・225 S e r i e s a n d p a r a l l e l (IPC) ..

これも、65・22の下位分類だ。

65・22 S p e c i f i c v e h i c l e a r c h i t e c t u r e

(IPC) ..

これもまた65・21の下位概念とのことだ。

65・21 H y b r i d v e h i c l e

とハイブリッドカーがようやく現れた。

逆に読んでいくと、180／65・23は、ハイブリッド車で車のアーキテクチャーに関するもので、直列と並列を切り替えるもので、直列にするか並列にするかをユーザーが選択できるか自動切換えが可能なタイプということになる。

ここまで読んでハット記憶がよみがえった。

「初代のプリウスは軽自動車に抜かれた」という逸話だ。

初代のプリウスが出たときにディーラーを訪ねたら、営業マンはあまりお勧めではないという気配だった。要するに「加速が悪い」という話だった。

その後、プリウスは大きな進化を遂げた。

「ハイブリッドシナジードライブ」というコピーだ。

加速が必要なときに、エンジンとモーターが協調して加速を生み出すあれだ。それを聞いた時は、また、欲しいと思った。プリウスの室内高がもう少しあったらきつと衝動買いしていただろう。（いや、財布がついていかなかったかな？）

米国分類180／65・23ってまさかそのこと？

その技術分類で、P a i c e はT O Y O T A と互角なのか？

そんなはずはないだろう？！

いやー、分類コードの問題だけで、

C C L／180／65・27とかC C L／180／65・28に同等のものが入っているんじゃないか？

順番にやっていこう。トヨタの調査はこの次だ。

これは真剣に調べないといけない。。。な。。。

特許は群れを作る。群れを作ることと進化し、強くなる。群れ解析をやってみて愕然とした。Patriceの特許は群れがひとつしかないのだ。ひとつの特許を分割して10の特許となったようだ。

さらに権利はクレームに宿る。

クレーム数の集計を行って、またびつくりした。

わずか10件の特許で総クレーム数が650近い。

その中でも7237634特許はなんと300を越えるクレームを抱いている。独立クレームは少なそうだが、それにしても300はすごい。

鬼気迫る執念を感じる。

先行技術の引用数ただものではない数が並んでいる。

それら全てに反証して、特許をもぎとったということだ。

先行技術のリストを見ていると、日本勢のものも散見される。

特許取得段階から戦争があつたと言えるだろう。

http://www.business-i.jp/print/article/200909050088a.nwc
によると、

「ペイスは2005年にも、同社特許を利用したトヨタのハイブリッド車、「プリウス」、「ハイランダー（日本名クルーガー）」、「レクサスRX400h」の特許侵害をめぐり、民事訴訟を起こした。ペイスの訴えが認められ、トヨタには430万ドル（約3億9000万円）の損害賠償が命じられたが、販売差し止め要求は却下された。」
とのことだ。

でも、この特許群では、出願、特許権利化、訴訟費用を考えると3億円程度はあつというまに吹っ飛んでしまっているんじゃないかとS氏に同情的にもなる。よくある「儲かったのは弁護士だけ」の世界か。

ちなみにS氏を発明者とする特許はさらに10件程度ある。そのうちのいく

つかには、譲受人がない。

そう、発明者が手元に残している特許がまだあるようだ。これらについては次回また調べようと思う。

なんだか、映画のシナリオが書けそうな話だ。

元エンジニアとして、トヨタ車のユーザーとして、ハイブリッドカーを欲しいと思っっているものとして、トヨタを応援している。

頑張れトヨタ！

前回は、トヨタをITCに提訴した。ペイス社の特許について調べた結果を報告した。

今回は、そのペイス特許群の唯一の筆頭発明者であるS氏の特許について調べた。

なお、ブログに先立ち動画版を作成してアップロードしている。

URLは

<http://www.youtube.com/watch?v=JZtW2eOr770&feature=channel>
だ。ご覧いただけると嬉しい。

S氏の特許群を解析して以下の点が明らかになった。

- サラリーマンからベンチャーを起業されたようだ。
- 一人発明者の時代に技術の種を仕込んだ。
- 電力変換技術から電気自動車関連へと重心を移動。

S氏はV社でサラリーマン時代をエンジニアとして過ごした。電力変換関係、DCコンバーターなどを開発されていたようだ。1987年から1989年ごろのことだ。

当時の連名発明者には、Rさんが2人いる。ちゃんと同僚がいるエンジニアだったようだ。

そして、1990年ごろに起業。

個人発明家の時代だ。このときは発明者は一人。すなわち、自分だけだ。技術の種の仕込み時期だ。

先発明主義を採る米国では、この頃を、発明が為された時期であると判断される可能性もある。

今から、20年近い過去だ。戦うトヨタ側としては嫌な数字だ。

1997年頃、ペイス社を創業。

ハイブリッドカーに集中して特許対策を行っている。

他の分野では一切特許的な活動がない。そして、それ以降も特許らしい特許は出ていないようだ。

執念をむき出しにして一人の男が特許明細書を練りに練っている。そんな姿が目につく。

さらに Assignment query を使って権利移動を確認してみると、

かなり複雑な動きをしている。

権利が移動できるということは、その特許に価値があると認める人たちがいるという証だ。

価値がないと誰もが思う特許は、誰も買わない。

S氏を買っている、認めている人たちがいて、お金を出している。

また、V社時代の特許は、最終的には、スマートグリッド関連企業に移っているようだ。

これも詳しく見る価値があるかもしれない。

資金調達のためだろうか？

特許が複数の個人と思われる人たちに譲渡されている。

担保？出資の見返り？

ところが、特許の管理の窓口は依然、ペイス社だ。

これはうまいやり方かもしれない。

お金を出す側にとつて、ペイスがつぶれてしまっても特許が残る。単なる出資だったら、株は紙くずになるだけだ。

S氏についての筆者の個人的な感触は、

「敵にするよりは味方にしたい」タイプだ。

アメリカンドリームを体現するべく、脱サラ起業だ。

一人で黙々と技術開発。名前のスペルからみると、移民系かもしれない。裁判の時、陪審員の心を打つ言葉を弁護士はつむぎ出せたはずだ。

でも、味方にするのは難易度が高そうだ。

お金を出している人がたくさんいそうだからだ。

ここでは、「トヨタエンジニアとS氏の攻防」の特許から探ってみたい。

最初は、ペイス社の特許の筆頭米国分類であるCCL/180/65.23、65.27、65.28に、トヨタがどういう特許を持っているのかを見る。相手の土俵での勝負だ。2009年9月以前で、70件弱の特許がヒットする。これらの特許における筆頭発明者数は約40だ。ペイス社のS氏は単純計算で40対1の戦いを行っているわけだ。例えば悪いが、S氏は、広いグラランドの中で40人のつなぎを着た男達に取り巻かれ、この戦いに負ければ取り返しのつかない痛手をこうむる。そんな緊張感がある。もしくは、その逆に、広いグラランドの中で40人の男達が何かに必死に取り組んでいる。その離れたところから一人の男が奇声ともつかない声を上げながら必死の形相でいる。どちらのイメージが実際に近いのだろうか？

さて、もうひとつ露骨な検索をかけている。トヨタの特許のうち、全文検索

でS氏の名前を含む特許を探した。特許審査官は先行事例を引いてきて、「これとどう違うんだ？」と発明者に問いかける。こうこう違うんですよと答え、説得できないと特許はもらえない。また、もらえるようにクレームをより限定的にしたりもする。この発明者への問いかけの際に文献名と筆頭者を知らせてくる。文献が特許なら、特許番号と筆頭発明者の名前だ。成立した特許にもこの記録が残る。それを第3者である我々も検索できる。そう、S氏の名前が載っている特許とは特許成立の過程で、S氏の存在を認識していた特許群になる。この特許群の大きさは約30。30件の特許にS氏の名前が載っている。筆頭発明者の数は約20人だ。その内の3人が、2件以上の特許で、S氏の先行技術に反証して特許を取得している。その他の17人は、1件の特許でしか、S氏に遭遇していない。

S氏遭遇特許数が3もしくは4の発明者はイニシャルにすると、共にI氏になる。区別するために、遭遇特許数にちなんで、I3氏とI4氏としてみよう。

まずはI4氏の場合を見よう。I4氏の4つの特許の元となっているのは1999年10月になされたひとつの日本出願だ。米国特許の審査の際に、審査

官が先行技術ではないかと引いてきたS氏の特許は2001年の4月に成立したものだ。1999年の出願時点では、S氏の引用特許はまだ成立しておらず、審査中であり検索できない。米国特許庁が出願公開を始めるのは2001年からだ。S氏の特許の出願日は、1999年3月だ。その差、7ヶ月。I4氏は最終的にはクレーム補正などを行って4件の特許を成立させている。1年に満たない時間差での戦いだ。

さてI3氏の場合を見てみよう。I3氏の米国特許の審査の段階で引かれてきているS氏の特許は、1992年9月に出願されている。成立は1994年の9月だ。他方、I3氏の特許の基礎となっているのは日本の4つの特許出願であり1995年の7月から12月にかけて出願されている。このS氏の特許の権利変動を調べてみると、とても複雑な動きをしている。

S氏の当該特許の成立は1994年9月6日。成立時には、S氏個人の特許だった。その直後、1994年9月26日に権利がペイス社に移っている。その後、2001年から2004年にかけて権利を小分けにして担保物権としているようで、見かけ上、譲受人の数が爆発している。知財活動のための資金を

確保しているのだろう。なお1992年ごろというのは、S氏の種まき時代に一致している。

なお、WIKIによると、プリウスのプロトタイプは1995年、初代は1997年から2003年、2代目は2003年、3代目は2009年となっている。

最後に、製品開発と特許対策を同時に行っていたであろうI3氏とI4氏に敬意を表したい。お疲れ様でした。

無線LAN：特許で揺らぐ

2009.03.17 CSIRO (サイロ)

日経エレクトロニクス2009.3.9の記事「特許で揺らぐ無線LAN」を読んだ。

バッファローが（テストケース？として）、サイロから無線LANの「基本特許」で訴えられていて、世界中の同業者が注目しているとのことだ。

このサイロは、パテントトロールとかの企業ではなく、オーストラリアの国立研究機関である、

Commonwealth Scientific and Industrial Research Organisation (CSIRO)なのだそうだ。

日本で例をあげれば、独立行政法人となった理化学研究所みたいところだろ

うか。

素朴に、どういう研究所なんだろうかと思った。

ぐぐると簡単にWEBページを見つけることができる。

色々なことをやっているようだ。

http://www.csiro.au/
には、Science Highlightsとして、
The science of climate change
Researching enzymes to improve our
world
Bushfires overview
Broadband wireless connecting Australia
などがあげられている。

むむむと思いつて、米国特許調査をやってみた。

まず、え”と思ったのは、権利者名として、

”Commonwealth Scientific and Industrial Research Organization”
と

”Commonwealth Scientific and Industrial Research Organization”
の二つがあることだ。

前者で約300件、後者で約200件の特許がある。

この権利者名の違いがお分かりだろうか？

（老眼の私にはなかなか違いが分からなかった。。。）

前者はOrganizationのZがSになっているのだ。

Organization（米語表記）

Organization（英語表記）

となるようだ。

ちなみに前述のホームページでは、Sの機構となっている。

（権利者名で検索を行う場合は、ご注意ください。ふわっとした検索が好ましい。あまりがっちりとかかむと潰してしまう。）

さて、脱線してしまった。

1980年から2009年2月末までに成立している特許が約600件ある。特許の共有関係で言えば、比較的単一所有が多いようだ。

その中で、デュポンとの共有特許は、若干数があり目を引く。

化学系の特許だ。

では、米国特許から見た活動領域を把握するために、筆頭米国分類を見てみよう。

最も件数が多いのは、米国分類435だ。次は、424。共にバイオ、医療系だ。

さてさて、無線LANはどこだろうか？

日経エレクトロニクスによると、問題となっている米国特許は
5,487,069

だそうだ。

要約をみると、（機械翻訳で申し訳ないが、）

「本発明はワイヤレスLAN、ピア・ツー・ピア・ワイヤレスLAN、ワイヤレス・トランシーバおよびデータを送信する方法を開示する。」

これですね。これ。

クレームを見る。

総クレーム数は70あまり。

独立クレーム数は、10程度だ。

きっちりと、特許対策を行っていて、漏れのないクレームを作っているという印象を持つ。

また、この特許に、割り振られた米国分類を見ると、

370/404 ; 370/338 ; 375/284 ; 375/348 ;

4 5 5 / 5 0 6 ; 4 5 5 / 6 5
となっている。

解析母集団の中には、

3 7 0、3 7 5、4 5 5としては

下記の特許がある。

5 4 8 7 0 6 9 W i r e l e s s L A N .

6 8 7 9 5 7 9 M e d i u m a c c e s s c o n t r o l p r o t

o c o l f o r d a t a c o m m u n i c a t i o n s .

6 5 1 2 7 9 5 E r r o r c o n c e a l m e n t f o r v i d e

o s e r v i c e s .

6 3 3 9 7 0 9 P e r s o n n e l l o c a t i n g s y s t e m .

7 0 4 3 1 9 5 C o m m u n i c a t i o n s s y s t e m .

。。。題名からして、さらに火を噴くかもしれない。。。。

さて、先の0 6 9特許の発明者は下記の5人。いずれの人もオーストラリア国籍のようだ。（AUがついている。）

O'Sullivan; John D. AU;
Daniels; Graham R. AU;
Percival; Terence M. P. AU;
Ostry; Diethelm I. AU;
Deane; John F. AU

ところが、いずれの発明者もこの組織の中では数件の特許に名前を連ねているに過ぎない。

どうも、この大きさに比べて発明者の影が薄いという印象だ。

さーて。ここからは独断に基づく解釈だ。

先の日経エレクトロニクスの記事によると、

『「かなり大きな金額だぞ」とバッファロー社内は揺れた」とある。

さもありなん。サイロの知的財産管理者（弁護士）は、バイオやメディカル特許を主に見ている。

バイオやメディカルは製品に使われている特許の数が比較的少ないので、特許

あたりのライセンス料の要求が高くなりがちだ。それに対して半導体などは、数百、数千という特許が絡んでくるので、相対的に特許あたりの価値は下がり、ライセンス料率は、特許あたりでは低く抑えられがちだ。

しかも、実績として、金払いのよさそうな、デュポンとかがいるんじゃないだろうか？

ところで、バッファローは本当に戦うべきだったのだろうか？

儲けたのは、訴えた側の米国弁護士と訴えられた側の米国弁護士だった。というのはよくある話のように思える。

今後、米国特許がからんで、米国内で、米国外の企業同士の訴訟が頻発する
と見る。

まさに外貨獲得の手段だからだ。ご注意、ご注意。

assignor と assignee とは譲渡人と譲受人という意味だ。

私のブログでは、assignee を権利者として説明している。

その方が実情にあっていると思うからだ。

もともと、発明は個人の人間の頭に生まれる。

その発明に対して、特許を受ける権利が発明者個人に対して発生して、それが成長して特許となる。発明者個人は、この特許を受ける権利を自分が所属する大学や企業に譲り渡し、企業は特許出願として、特許庁に出願する。また、その費用を負担する。企業で生まれる発明の場合は、ほとんどこの場合だ。

また、就業規則や、契約によって、あらかじめ、「特許を受ける権利は会社に譲りますよ。」と約束していることが普通だ。だから、特にハイテク分野の場合は、assignee 権利者と捉えるのが実態にあっている。

でも、まれにassignee がない特許がハイテク分野にも存在する。これは、発明者本人が誰にも特許を受ける権利や特許権を譲り渡していない、す

なわち、譲受人が存在していないことを意味している。

ところで、

特許を受ける権利や特許権は自由に譲渡できる。不動産の場合と同じく、他者に対抗する場合は、その権利の変動を特許庁に届ける。米国特許庁の場合、この権利の変動をWEBで簡単に検索できる。これがまた、面白い。やっついて飽きない。

例えば、前回のCSIRO（サイロ）で無線LAN系の特許としてピックアップした、

5 4 8 7 0 6 9 W i r e l e s s L A N .
6 8 7 9 5 7 9 M e d i u m a c c e s s c o n t r o l p r o t
o c o l f o r d a t a c o m m u n i c a t i o n s .
6 5 1 2 7 9 5 E r r o r c o n c e a l m e n t f o r v i d e
o s e r v i c e s .
6 3 3 9 7 0 9 P e r s o n n e l l o c a t i n g s y s t e m .

7043195 Communications system.
の権利移動についてみてみよう。

http://assigments.uspto.gov/assigment/s/q?dbllpat
のページに行ってみよう。

ここで、Patent Numberのところに先の特許番号を入れていってみよう。

5487069の場合は、発明者からCSIROに譲渡されているだけのよう
だ。

6879579の場合は、Assignmentが3回ある。

Assignment1では、3人の発明者がCSIROに権利を譲渡して
いる。

Assignment2では、発明者が一人減って、二人追加されている。

また、譲受人がCSIROに加えて、M大学が追加されている。

何があつたのかは、ここの情報だけでは分からないが、注意するべきだろう。優先権主張に伴う新たな特許出願などにおいて新規事項が追加されている可能性がある。

侵害訴訟を受けた場合は、反撃のきっかけであるかもしれない。

Assignment³では、先の減った発明者が復帰して、さらに一人追加されているようだ。

これはいったい何を意味しているのだろうか？
色々と想像できる。

発明を行う場合には、議論を行うことが多い。

その議論を元に議論の参加者がアイデアを特許として出願する。

後に、その最初の議論の参加メンバーが「俺も発明者だよ」と言ったのかもしれない。

しかも、所属が違う。

まるで、推理小説だ。

でも、いずれにせよ、当事者たちはこの特許を重要だと考えていると推定でき

る。

6512795の場合は、assignor（譲渡人）が個人3人で、assignee（譲受人）は2つの組織だ。

ひとつは、当然CSIROだが、もうひとつはUNISEARCH LIMITEDという。

きっと、発明者の誰かがここの組織にゆかりがあったのだろう。

6339709と7043195の場合は、単純に発明者がCSIROに譲渡しているだけのようだ。

さて、これまで見た限りでは、6879579の動きが一番気になる。

ちなみに、このページでは、assignor, assigneeでも検索できる。

名前の一部を入れればいい。

Assigneeとして、UNISEARCHを入れて検索してみる。150
件もヒットする。

しかも、権利化前の出願段階での承継が多い。

何者なんだ、君は？

GOOGLEで検索してみる。

同名のものが多々あるようで、釈然としない。

色々と探しまわって、この資料を見つけた。

http://www.smrj.go.jp/keiei/dbpsdata/
material/chushou/bkeiei/keiei
isaimu/doc/tlohl3.doc

この資料は資料で面白いが、それによると、UNISEARCHはTLOのよ
うだ。

CSIROが無線LANで成功すれば、後に続きたいと思う組織は多そうだ。

前々回、前回と無線LANに関する特許侵害訴訟で話題となっている、CSIROの持つ米国特許について報告した。

今回は、その中で、「気になる動き」のある米国特許6879579をさらに見ていこうと思う。

気になった点は、前回の投稿で述べたように、

「6879579の場合は、Assignmentが3回ある。

Assignment1では、3人の発明者がCSIROに権利を譲渡している。

Assignment2では、発明者が一人減って、二人追加されている。

また、譲受人がCSIROに加えて、M大学が追加されている。」

という具合に譲受人の変動が多いことだ。

ところが、全文明細を見てみると、この原稿執筆時点（2009. 3. 29）で *assignee* は CSIRO のみとなっている。他方、発明者は変わっていない。*assignee* から M 大学が消えている？！

ライセンス交渉を行う場合には、窓口がひとつの方が有利な交渉ができる。それを意識しているのだろうか？ 水面下で何かが始まっている。そういう気がする。

さて、この 579 特許を注視しているのはどこだろうか？

米国特許庁の検索ページからは、

References Cited と *Referenced By* のふたつの情報を知ることができる。

最初の "*References Cited*" はその特許出願の際に、審査官が先行事例として引いたものや自己申告した特許が記載されている。引用特許群だ。

それに対して、"*Referenced By*" の方は逆に、他の特許の審

査の過程などで、他の特許の先行事例としてこの特許が引用されたものを示している。被引用群だ。引用の方はその特許の審査完了、特許成立の時点で確定しているために、WEB公報の中では書誌部に確定的に記載されている。他方、被引用群は時刻々変化するために、サーチエンジンへのリンクとなっていて自動的にその時点での被引用特許を引いてきてくれる。これもとても便利な機能だ。

この「Referenced By」のリンクをクリックすると、下記の特許群が出てくる。

17,443,808 Network working methods and apparatus

27,406,319 WLAN having load balancing by access point admission/termination

37,400,901 WLAN having load balancing

p	q	6		o	p	l	o	5		a	m	4	i
r	u	7,		n	e	s	p	7,		v	e	7,	n
i	a	2		s	c	i	e	2		e	d	3	b
s	i	7		y	a	n	r	7		n	i	2	a
i	t	2,		s	a	a	a	7,		e	u	4,	s
n	y	1		t	l	y	i	7,		w	m	4,	e
g		1		e	c	c	o	7		o	a	6	d
	w	9		m	s	o	n	7		r	c	8	o
	i			i	i	n	m			w	c		n
	r			n	a	a	o			o	e		a
	e			w	w	w	f				s		a
	l			i	i	i	M				S		c
	e			r	r	r	e				y		c
	s			e	e	e	t				s		c
	s			s	s	s	h				c		e
	d			d	d	d	o				o		s
	e			a	a	a	d				n		p
	v			n	n	n	a				o		i
	i			e	e	e	n				i		n
	c			s	s	s	c				n		t
	e			s	s	s	o				a		l
	s			s	s	s	m				p		o
				s	s	s	u				o		a
				s	s	s	n				w		d
				s	s	s	i				e		i
				s	s	s	c				r		n
				s	s	s	a				—		g
				s	s	s	t				s		
				s	s	s							
				s	s	s	e						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						
				s	s	s	i						
				s	s	s	s						
				s	s	s	a						

7 7, 130, 916 Linking frame data by
inserting qualitative information controls

8 7, 020, 117 Command processing method
and radio communication apparatus
us

被引用数(Ref By)は8だ。

579特許の場合は成立年が2005年だ。それを考慮すると、被引用数は比較的多いのではないかと思う。これから、審査官達が579特許を重要だと考えていると推定してもあながち間違いではないだろう。

上記の被引用特許群のassigneeは下記の通りだ。

7, 443, 808 Coaxsys, Inc. (Los Gatos,

7, 406, 319 A T & T Corp. (New York, NY)
 7, 400, 901 A T & T Corp. (New York, NY)
 7, 324, 468 Broadcom Corporation (Irvine, CA)
 7, 277, 737 Bosch GmbH; Robert (Stuttgart, DE)
 7, 272, 119 Sharp Laboratories of America, Inc. (Cambridge, MA)
 7, 130, 916 International Business Machines Corporation (Armonk, NY)
 7, 020, 117 Sony Corporation (Tokyo, JP)

と、有名所とがちんこ勝負？をしているようだ。

発明は、人間の個人個人の脳細胞に生を受ける。資本金の額にも、従業員数

にも基本的にはよらない。

個人企業とも言える研究者が大企業と渡り合っているのをみるのもなかなか痛快だ。

そしてそれを検索、調査することで誰もがその存在と内容を知ることができる。

これらは、特許制度という人類の英知が生み出した粹組みのすばらしい点だ。

前回、6879579特許が無線LAN規格との兼ね合いで、「気になる」な—という話をした。

今回からは、その中身を見ていこう。

さて、相手は米国特許であり、当然、英語で明細書が記載されている。

翻訳ソフトもあるが、それでは、たいてい、意味もとらずらいところが多々ある。さらに、その技術分野に明るくない時は、なおさらだ。そこで、今回は、この分野の予備知識を入れていくことにする。

書店やアマゾンなどで、関連書物を買ったり、ネットで調べるというのも手だが、やはりここは特許から調べたい。でも、英語はつらい。

いい手がある。。。。

前回、調べた579特許を先行技術として引いている日本特許を見ればよい。米国特許庁の審査官が「関係あるんじゃないの?」と知らせてくれている特許だ。

米国特許調査から 2010

2010年1月25日 第1版第1刷

著者 門 伝也（もん でんや）

発行者 山田 俊郎

発行所 セルボニクス 出版部